

野球の思い出(学級対抗軟式野球)

二十八回生 池島 正員

JR京葉線・新習志野駅が最寄り駅の我が家の近所に、バックネット・サイドネットを備えたベースボールのできる公園があります。そこでは、休日になるとリトルリーグかその予備軍と思われる子供たちが、お揃いのユニフォームを身に着け、一生懸命に練習している光景が見られます。それを時々見物して、日本では、野球が相変わらず人気スポーツであると感じつつ、自分が野球好きになつた子供時代を思い出すことがあります。草野球のできる空地探し、草むらなどに行方不明になつた貴重品のボール探し、住宅に打ち込み迷惑かけたこと等々、夢中に遊んでいた頃の思い出は尽きません。

団塊世代のビートたけしさんは、最近の自著「野球小僧の戦後史」の中で「当時夢中になつたのはラジオの野球と相撲で、下町空地の野球小僧だった」と述べています。育った環境は異なりますが、同じ時代に東京でも少年野球が盛んだったことが分かります。

現在では、草野球のできる自由な空地もなくなり、公園でも野球などを禁止しているところも多く見受けられるようになりました。当時と比べると野球環境が

大きく変わりましたが、野球本来の魅力は今も変わりないと思っています。私の学生時代、社会人時代の経験から、同世代の多くの野球好きが日本に存在することは間違いないことと確信しています。

この2月に千里山会誌の編集に尽力されている萩原(直大)さんから、次号の特別企画「学校行事の思い出」について、寄稿依頼のメールが飛び込んできました。文章作成経験も少ない私ですが、萩原先輩との関係(後述補足)もあり、本テーマに、大好きな「野球」を選び、チャレンジしてみました。

本稿では、私が好きになつた野球について、その根源となる小学校時代の経験を中心に、記憶を頼りに、その時の状況を思い浮かべて記述しました。少しでも共感していただける所があれば、寄稿した甲斐があり、幸いとすると幸いです。

小学低学年の頃の私は、背丈だけは2、3年上級生と同じくらいの痩せ型ノッポのお絵かきが好きな少年で、足も遅く、運動能力の長けた方ではありませんでした。

そのような私が、初めて野球を知つたのは、千里第二小学校(千二小)に転校してきて1年後の3年生の時でした。垂水神社近くの同じ団地(府営豊津団地)に居て、相撲などでよく遊んでもらっていた2年上の

桃井（正大）先輩から「野球やらへんか？」と声をかけられたのが始まりでした。「野球？知らんし、やったことないもん」と私が消極的に答えると、「これから試合なんやけど、一人足りんのや、教えたるから来いや」と最初は命令口調でした。野球のことが理解できなかつたので、渋っていると最後は「頼むから来てや」と懇願口調に変わり、不安な気持ちで参加することにしました。

我が家では話題にもしたことがない「野球」でしたが、現場で、その仕組み、ルールなどの簡単な説明を受け、道具を借りて参加しました。

千二小の桃井先輩ら5年生たちの学級対抗戦のための練習試合と説明を受けたように記憶するこの試合は、豊津団地の近所の大きな溜池の傍の空き地で行われました。試合では、先輩に度々指示を仰ぎながらの戸惑い状態が表れていたのか、「失敗してもいいから気楽にやれよ」などと気を使ってくれた優しい先輩たちでした。試合中に、初めて耳にする「ドンマイ（気にするな）」を連呼されたような気もしますが、試合内容は、まったく記憶にありません。その試合では大きな失態が無かったのか、人数不足の補充要員で貴重だったのかは分かりませんが、その後も桃井先輩から声をかけられ、何度か野球をするようになりました。

野球は、9人が通常ですが、最低5人集まれば、三角ベース（二塁ベースを抜いた形式）にして実戦形

ずれにせよ、この学級対抗は、先生方が審判をされた軟式野球の本格的な試合で、野球に興味ある生徒の間では非常に盛り上がったように記憶しています。

このような思い出から、この軟式野球学級対抗戦を「学校の公式行事」の一つとして扱わせていただきました。

我が花組には、大学前（阪急の旧駅名）の駅前で実家が八百屋さんだった鈴木（良彦）君を筆頭に、島貫（乾朗）君などが運動能力の長けた中心メンバーでした。私は、草野球では下手な代表的ポジションであるライト（右翼）の下位打順でしたが、選ばれて野球ができることが大変嬉しくて、両親（特に父親）に報告したと思います。

当時の千二小のグラウンドは校舎を背にすると奥行きがなく、特に右翼守備は、土手ぎりぎりに位置取りしても、一塁守備と交錯するような狭い領域でした。当時、土手の上には林があり、その中に二宮金次郎の銅像がありました。

記憶にある対戦相手は、何人かの選手が少年野球チームに所属しているとの噂があった星組（担任…奥山久夫先生）との対戦でした。その噂の選手の一人が速球、変化球を投げるサウスポー投手の国分（明）君で、我がチームは劣勢でした。試合の後半、私の何度目かの打席で、俗にいう大根切り打法で高めの変化球のボール球がバットの芯にまぐれ当たりし、二宮金次

式の試合ができます。記憶では、この野球仲間の行動は、参加人数を確保して、ベースボールのできる空地探しから始まり、空地があると取り敢えず練習開始です。既に見知らぬ他校の野球少年らが占領していると対抗試合の交渉です。また、その逆の場合もあります。交渉が成立し、ルールの確認をして、試合を始めます。その時の審判は攻撃側が交代して担当することが多く、セーフ・アウトでよく揉めました。その度に、ルールの知識も豊富になり、野球を続けたい一心で論争の和解術も子供ながら次第に身に着けるようになっていったように思います。

私が5年生（花組担任・松本尚子先生／体育・江口禎文先生）の時に、千二小で軟式野球の学級対抗戦が計画されました。それまで、クラス内で野球を話題にすることが無かったため、私が野球をすることをクラスメートは知りませんでした。そのため、そのままでは代表に選ばれないと思い、年長組と野球をしていた経験があると懸命に自己PRをしたような記憶があります。結果的に野球のルールを知っていて試合の経験もあるということでした。この時に、桃井さんら上級生に誘われた最初の試合のことを思い出し、この学級対抗戦が我々にも引き継がれているのだと思いました。この行事の中心人物は誰だったのでしょうか？真つ先に体育を教えてもらっていた江口先生の顔が思い浮かびますが、真相はわかりません。い

郎像の頭上を超え、林に飛び込みました。これは、二塁打（エンタイトルベース）でしたが、ホームランを打った気分です。恐らく内心誇らしげに「どや顔」になっていたものと想像できます。一方、守備では、使い慣れないグローブのせいでエラーをしてしまいました。自分同様、下手な人も混じっているのです。エラーはつきもので、我がチームもシャットアウト（完封）にはならず何点か取りましたが、試合は負けました。

この時のエラーしたグローブにも思い出があります。野球を始めた頃、我が家でも野球を話題にするようになり、父親にねだってグローブを買ってもらいました。これが子供用の布製のもので、片手だけでは確実に捕球するのは難しく、時々捕り損ないがありました。試合で他人の革製のグローブを試してみても、非常に捕球しやすいことを知っていましたので、家では多分欲しそうにしていたことが想像できます。父からは、「初心者はこれで我慢して頑張れ、革製はもう少し上達してからや」と言われたように思います。

5年生のある日、父親が「どや、これはプロのお古やけど、お前のために貰ってきた。」と皮のグローブ（中古品）2つとユニフォーム、スパイクを持って帰ってきました。ユニフォームを見ると「ブレーブス」（阪急ブレーブス）のネームが入っていました。

貰ってきたグローブの1つは、父が言うには、引退した有名な投手が使っていたグローブということだ

した。相当使い込んだもので、手のひらの部分は皮一枚で直接捕球すると手のひらが痛くなります。それを避けて、指部で捕球しようとする、小さい手では指先まで力が十分に伝わらなくて、結果的にしまりの悪いグローブとなるような代物でした。学級対抗戦には、慣れた布製を使用するか、見栄を張ってプロ選手のお古の革製を使用するか迷いましたが、考えた末、見栄の方を選択しました。

その結果、試合では、危惧した通りライトフライをポロリと落としてしまいました。落胆しましたが、この顛末を父親に報告し、その年に、片手でも安心して捕球できる念願の革製グローブを買って貰い、飛び上るほど嬉しかったことを思い出します。今も、その思い出のグラブを残しています。

この学級対抗戦を通じて、すごく上手でレベルの高い人たちがいるなど感じました。そうした人たちは野球用のユニフォーム着用している人に多かったように思います。野球では、スライディングなどを行うため、衣服が破損し、泥だらけになりやすく、まじめにプレーするなら専用の用具が望ましいのです。そのことを父親が知っていて、野球するならグローブだけでなくユニフォーム、スパイクも要ると思つて貰ってきたのでしよう。それらの着用を勧められ、断ると至極残念そうな顔をしていたのを今も思い出します。スパイクは、危険なため使用禁止だったと思います。ユニ

フォームは、新品に近かったのですが、ゆったりしたデザインに加えてサイズがまるで合わないため、それを理由に父親の折角の思いやりには応じませんでした。プロのユニフォームという話題性はあるものの子供の感覚から、これを着用して出場したら間違いなく冷やかしの的になると思い、必死に断っていたことを覚えています。

実は、父は、京阪電鉄に勤務していましたが、同時に「阪急ブレーブス」球団の監査役（旧商法）も兼務していましたので、球団で要らないものを貰ってきようです。

父との間で野球を頻繁に話題にするようになり、3年生の時に初めて西宮球場に連れて行ってもらいました。照明に映える芝生が綺麗なプロ野球のナイターを初めて観戦し、大感激しました。これを見て、度々連れて行く気になったのか、翌年の観戦から私を「阪急ブレーブスのファン友の会のジュニア会員」にし、親子での休日の西宮通いが始まりました。

この西宮通いで思い出すのは、いつも早寝の子供には遅い時間で眠たかったこと、帰りの阪急電車が満員だったことです。また、どんなに接戦状態の緊迫した注目する試合でも、最終回まで観戦せずに早目に退場するのが常で、その点は不満でした。一度だけ最終回半ばまで観戦した結果、帰りの電車が超満員となり、それに懲りてからは、父親の判断に全面的に素直に従

うようになりました。

当時の阪急ブレーブスには、高卒で入団し、20勝しても新人賞が取れなかった梶本隆夫投手（名球会入り選手）がデビューし、活躍した昭和29年のシーズンも印象的でした。こうして、何度か西宮に足を運び、父親の解説付きで、次第に熱心な阪急ファンになっていくことになりました。プロ野球のファンでは、圧倒的にセリーグファンが多く、その中でも、巨人、阪神ファンが群を抜いていました。当時、阪急ファンを名乗ると、「えっ、なんで阪急や」と聞き返され、不思議がられるので、俗にいう「隠れファン」的にならざるを得ませんでした。大人になって、意外と隠れ阪急ファンがいるのを発見して、野球談議に盛り上がったことも思い出の一つです。

日本のプロ野球以外での野球観戦では、日米野球、高校野球（甲子園）も記憶に残っています。

日米野球（大阪球場？）では、来日した大リーグ（ヤンキース？）のミッキー・マントル、ヨギ・ベラの名前に記憶があります。試合では、捕手が座ったまま一望に矢のような牽制球でランナーを刺したこと、大リーグの打球の速さを目の当たりにし、そのパワーの違いが今も目に焼き付いています。

また、甲子園野球では、王貞治投手（エース）が早稲田実業2年生で出場した春の選抜試合を観ましたが、あのような偉大なバッターになるとは思いもしま

せんでした。しかし、王、長嶋選手だけは、ここぞという時に結果を残すため、阪急ファンでも別格の尊敬する選手でした。

このような経験から、いつの間にかプレーするのも観るのも野球というスポーツが大好きになっていました。

こうして振り返ると、私にとって、当時の空地で行った少年草野球の経験が、野球への思いだけでなく、その後の人生にも影響を与えた懐かしい思い出として残っています。

草野球の他流試合の後日談として、その後、進学した中学、高校で、「君はあの時の野球少年では？」と確認した千二小出身でない異なる対戦相手の二人と再会しました。この二人に気づいたのは、審判の判定によく文句をつけるので顔を覚えていたからです。特に、同級生となった中学の時の再会者とは、親友となり、両者が東京勤務時代の昭和44年に再会し、お互いの結婚にも影響し合った仲で、今も親交が続いています。

こうした当時の少年野球の実状を考えると、軟式野球が小学校の教育方針になっていたのでしょうか？千二小の軟式野球大会は昔から公式行事としてあったのでしょうか？私には、その真相は不明ですが、いずれにせよ、この時代の野球の経験、それから始まった人的交流などが大きな財産になっていることは間違い

ありません。

また、厳格で近寄り難かった亡父とは、こうした野球を通じて会話が出来るようになり、親の実直さ、愛情を身近に感じるようになったのも野球のお蔭と今も感謝しています。

お絵かき好きの少年は、中学の時に市展に入選し、少し自惚れて、父親に「絵描きになりたい」と言っていて、「アホなこと言うな！」と一喝され、建築の道に進みました。会社退職後、絵を趣味にと道具を揃えて10年経ちますが、一向に絵心が湧かず、手つかずの状態を女房に冷やかされています。しかし、野球好きなどころだけは今も変わっていません。

プロ野球への思いは、阪急ブレーブスが消滅し、一時下向きになりましたが、現在では、地元の千葉ロッテマリーンズのファンとして復活し、その野球を楽しんでいきます。(完)

【補足】

1. 千里山会入会の経緯

昭和43年から通勤に総武線各停を利用していった時に、大学OB会（東京地区）の一環で、総武線快速の東京駅乗り入れ工事の見学会が企画され、参加しました。その案内役をされていた土木技術者の萩原さんのことを、3年ほど前に偶然に千里山会のホームページで発見し、千二小出身者であることを知りました。その後、昨年の初めに大学の土木技術者（東京）の個人的な集いに、建築技術者の自分にも初めて声がかかり、先輩の萩原さんと再会することができました。こうした萩原さんとの奇遇が重なって、昨年の「千里山会」入会、懇親会初参加へと繋がりました。既報（会誌16号）にも掲載された総武線快速東京駅乗り入れ工事によつて、開通後、満員電車通勤が解消され、非常に有難かったことが今も記憶にあります。

2. 千二小の軟式野球大会は「学校の公式行事」?

この学級対抗戦が6年生時にも開催されたのか記憶がありません。当時、新校舎建設計画があり、そのために行事が無くなったのか？よく分かりませんが、建設場所の確保などから二宮金次郎像が移設されたことは記憶しています。

3. 草野球の普及要因

草野球が庶民的スポーツとして、子供を含め普及した大きな理由の一つに、大正期に日本人が開発した軟式球（内部が空洞のゴム製ボール）の存在があります。日本人特有の知恵と工夫の賜物と評価できる軟式球は、現在のヘルメットなどを着用しない時代には、硬式球に比べて、プレーして安全・安価であったことです。それでも、子供には貴重品なため、紛失しないように努力したものです。そのため、長い間、大事に使用し続けたボールは、打撃の衝撃により、稀に割れるようなことがあります。割れた場合のルールは、普通は決めていませんので、試合では揉めます。私の経験では、ノープレーにしてやり直したような記憶がありません。

また、野球は競技スペースの要るスポーツの一つです。しかし、空地で行う草野球では、誰のアイデアか不明ですが、三角ベースなど、少人数、あるいは限定されたスペースで可能な工夫にも日本人らしさを感じます。

4. 執筆にあたって

当時の記憶の裏付けとなる写真などは、両親の遺品の中から見つけました。幸いにも、几帳面な性格の父は、時と場所が分かる説明を添えて残し

てくれていましたので、助かりました。私が小学5年生頃の写真の傍に、父親が会社（京阪）の仲間たちと野球の試合をしている写真があり、その野球チームの中心的存在のように映っていました。子供の影響を受けたのか？聞いてみたい気がします。今となっては叶わぬことです。文中の2つの中古グローブの片方はキャッチャーミットで、恐らくキャッチボールするのに必要と思ったのでしょう。父親とキャッチボールをしたのは、入手した当初くらいで、ほとんど記憶がありません。

また、父の遺品の中に、「社員必携」という職務の任免・昇給などの辞令用紙に替わる企業の個人手帳が残っていました。10歳上の姉、3歳下の妹の3人の子供を抱えた両親にとって、私の小学生時代が最も生活的に変な時期だったことが分かり思わず涙しました。

今回の執筆では、両親との思い出を再認識するとともに、新たな一面を発見する機会となったことに感謝しています。

写真3：大喜びしたグローブを手にしたスナップ(中学低学年の頃)



豊津アパートの裏庭にて
(視線の向こうにある擁壁にボールをぶつけて、一人でゴロの練習をしていました)

写真4、写真5：父親の社内野球のスナップ(1955年頃)

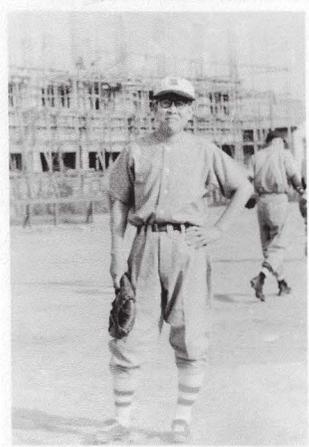


写真4：父親のユニホーム姿



写真5：その時のプレー中のスナップ
(打者が父親)

写真1：4年雪組 秋の遠足(1954年六甲山)



中央が担任の西野周一先生 私は向かって右端(立ち姿) 私の前が海野栄一君
前列2列目左から3人目が村中重夫君(18回生 滝澤万里子さんの弟)

写真2：その当時の豊津アパートの裏庭で桃井先輩とのスナップ



真中が私でその前が桃井(正大)先輩